Akny
蒼依空の受難の日々
其の二
泡蔵
AWAZO

目　次

序　章「赤い闇の中で」…… 3
第一章「仮装仲間と共に」……29
第二章「学校の日常。空の日常。」…… 57
第三章「あの娘は誰ぁれ？」…… 97
第四章「みんな怪しい……」…… 121
第五章「欲望に流されて……」…… 143
終　章「最後の戦いその結果？」…… 173

おまけ　蒼依空の淫欲の日々 …… 212

あとがき…… 276

序章「赤い闇の中で」

赤い月が夜の街にぽっかりと怪しく浮かんでいた――

そんな異常な程赤くま光る月の影響なのだろうか、誰もいなくなった公園全体が赤く染まっている。

赤いセロハン越しに世界を見ているかのように……

世界に赤しか色がなくなってしまったかのように……

目にする全てが赤く染まっていた。

いや全てと言う言葉には少し語弊がある。この異様な世界にいる登場人物二人だけが、まるで別の次元（レイヤー）にいるかのように赤の影響を受けていない。

マニトゥフィールド――

悪魔が作り出した特殊空間――

インキュバス・サキュバスを捕らえるために用意されたバトルフィールド。

そう、赤く染まらない登場人物二人は今まさに壮絶な戦いの真っ最中だったのである。まぁ、その戦いの方法とは「ＳＥＸ」なのだが……

しかし、戦いはどちらかと言うと一方的であった。

現代社会の強い女性を象徴するように少し筋肉質で引き締まった躰を持つ女は、一糸まとわぬ姿で男にまたがり、動きを止めている男とは対照的に腰を激しく動かしている。しかもその行為はサディスティックで、打ち付けるように、時には搾り取るようにねちっこく腰が動かされていた。そんな激しいＳＥＸを彩るように、女の表情は恍惚で薄い笑みを浮かべながら、苦しみに顔を歪める男を楽しそうに見下ろしているのだった。

「フフフッ、気持ちいいでしょう……ハァハァ……でも、まだ解放してあげませんからね」

喘ぎ声交じりに女は更に口角を吊り上げ目を細める。

その表情、ゾクリとする程美しい。年のころは20代と思われる若い女でありながらこの妖艶さ、その笑みは

サキュバスを彷彿させた。そんな心底ＳＥＸを楽しんでいるいやらしい表情を見せられたら、どんな男でも簡単に果ててしまうことだろう。男もまた他に漏れず絶頂の淵に立たされている。だが込み上げてくる射精感とは裏腹に男は射精することができず苦しんでいた。なぜか？　それは女の手に握られた青い光の糸が男根の根元に巻き付き射精を抑え込んでいるからであった。

「ウッ……アッ……」

男の苦しそうな呻き声が上がる。この状況、一体どちらがキャッチャーなのかわからなくなってしまう。しかも射精を抑え込んでいる意味がわからない。インキュバス・サキュバスを捕まえるには絶頂が起因となっていると言うのに……

「ハァハァハァ……いいわ……いい表情だわ。ゾクゾクしちゃう……でもまだ、まだ捕まえてあげないから……私が飽きるまで我慢しなさい」

そう言って女は楽しげ見下ろし、男が苦しむとわかっていながら下腹部に力を入れ射精を促すよう腰を動かした。それはまさしく性欲に狂ったサキュバスの行いにしか見えない。しかし、悪魔のように男の性を弄んでいる女こそ悪魔から人知れず人間界を守っているキャッチャーに他ならなかった。

キャッチャーは性別が転換される。と言うことはこのキャッチャーも元は男。キャッチャーの資質として男であればどこか女性的、女であればどこか男性的なのが定説であったが、このサディスティックで筋肉質な躰を見ていると定説に反して元々男性的だったのではないかと思えてしまう。確かに女性でもサディストは沢山いる。筋肉質な男が女性的であることも多い。一概にキャッチャーの資質が「女性的」「男性的」だけで決まるわけではないが、その少し乱暴なＳＥＸや蔑（さげす）むような瞳が男らしさを連想させたに過ぎない。

しかし、女性にチェンジしている桑畑晴登（くわばたはると）の本当の性格は真逆と言っていい程かけ離れていた。19歳になる晴登は地元でもかなりレベルの高い大学に通っている。物静かな少年時代を過ごしており孤立することも多

く、休み時間なども本ばかり読んでいたので運動はダメだが勉強は常に五本の指に入る優秀な生徒だった。しかし、高校生の時、その暗い性格のせいでイジメと言わないまでもクラスから迫害を受けてしまった。迫害の原因になったのが、足を滑らせ階段から落ちそうになった時、思わず女の子みたいな悲鳴を上げてしまったことで、その悲鳴も左程大きな声ではなかったのだが、運の悪いことに数名のクラスメイトに聞かれてしまい、それから背も小さく意外と整った顔立ちから「姫」と呼ばれるようになってしまったのだ。文化祭の時も今では意外と多くなっているメイド喫茶をやれば男であるにもかかわらずメイドをやらされたりと晴登の本意ではないことを数多くやらされてきた。その日々に耐え大学生になった時、インキュバスのカーリーに見初められキャッチャーとなったのだ。いたって常識人であった晴登は真っ黒な球体に羽根の生えたカーリーの姿に尋常じゃない程パニックをおこしたが、カーリーの魔力によってある程度魔界の情報をすり込まれ、落ち着いた晴登はキャッチャーになることを承諾した。決め手になったのはやはり女性にチェンジできることだったらしく、それまで自覚していなかったと言うか自ら避けてきた本当の感情をカーリーによって引き出されたのだった。

「アッアッ……アウッ……ハァハァハァ……いいわよ。その表情……もっと苦しみなさい。もっともっと私を感じさせるのよ……ハアアァァ……イイわぁぁ……」

再び晴登の口からサディスティックな台詞が紡ぎ出される。物静かでネクラな青年はどこへ行ってしまったのか？　これも抑圧された生活をしている反動なのだろうか？　もしくはキャッチャーとして多少の魔力が使えるようになった御陰で本来望むべき自分になったのかも知れない。それにしても気弱な青年がサディスティック淫乱女にチェンジするとは……人間の心の闇は誰しもある程度深いことを物語っている。

「晴登。いい加減捕まえて欲しいんだけど！　何回マニトゥフィールド展開してると思ってるんだい？」

傍らを飛び回っていたカーリーが、いつでもインキュバスを捕らえず先延ばしにしている晴登にいい加減呆

れたのか軽い抗議を入れる。
「ハァハァハァ……な、なに言ってるのよ。コイツがイクからって無理矢理こっちまでイカされるなんてまっぴらだわ。私が満足するまで捕まえないわよ」
腰の動きを止めぬままカーリーを見上げ意外と冷静な口調でキッパリと申し出を断った。
「でももう一時間半もやってるんだよ」
「もうっ！　うるさいわね。もうすぐイキそうなんだから黙って見てなさいよ」
晴登は目を細め鋭い視線でカーリーを睨み付けた。まぁそんなことをしたって悪魔のカーリーが人間の睨みでビビることなどないのだが、カーリーは大きな溜息を一つつくと晴登の視界から外れた。
「ハイハイ、わかりましたよ。それじゃあ早いとこ頼みますよ」
これもいつものやり取りである。晴登がインキュバスを捕獲する時は必ず男根を縛り上げ射精を先延ばしにしていた。それもこれも男の射精に会わせ無理矢理絶頂させられるのが気に入らず、自分が満足するまで、自らの躰が自然に絶頂を迎えるまで捕まえることはしなかった。長い時は二時間を越え、短い時でも一時間以上しているのだからかなりの遅漏女である。
だが今日も既に長時間男を犯し続けているので、言葉通り絶頂までもうチョットのところまできているらしい。
「ハァハァハァ……イッちゃいそう……アウッ……さぁ私をイかせるのよ……私がイッたら糸を解いてあげる……ハアアァァァ……気持ちいい……イクわ……イクわよ……」
言葉が盛り上がって行くに連れ腰の動きも速くなっていく。そして乱暴に腰を深く打ち付けボルテージが最高潮になったのに合わせ青い光の糸を解いた途端、男根からは大量の精液が放出された。
「イクゥゥゥゥゥ！！！！！」

男の絶頂と同時に晴登もまた絶頂を迎え、遠慮のない絶頂の叫び声が赤い世界に木霊する。男が射精で躰を震わせている中、男の躰が淡く光り出したかと思うと薄皮を剥ぐように光が秘裂の中へ吸い込まれていく。

「ギャアアァァァ！！！」

男の口から悲痛な叫び声が上がった。それは男の叫び声だったのか、囚われるのを怖れたインキュバスの断末魔だったのか……

そして全ての光が吸い取られた途端、男の意識が途切れ動かなくなった。

「……」

男が気絶したことなどお構いなしに、晴登は今尚絶頂の快楽の中を彷徨っていた。

5秒……

7秒……

平均絶頂の7秒間を超え晴登は躰を震わせ続ける。そして十秒を超えようとした時、反り返っていた晴登の躰がガックリと崩れ、動かなくなった男の胸に手を着き躰を支えた。

「ハァハァハァハァハァ……」

荒くなった気持ちよさそうな呼吸音が赤い世界を支配していた。一時間半も動き続けていたのだそりゃ疲れるだろう。だが晴登の口元には心の底から嬉しそうな笑みがこぼれており、女になった喜びを味わっているようだった。

「やっと終わったみたいだね」

至福の笑みを確認したカーリーは傍らに飛んでくると晴登にそう声をかける。しかし、晴登は虚ろな目をカーリーに向けると怪しく唇を歪めていた。その表情、まだ終わっていないと言っているようだ。

「はあぁぁ～……やっぱりね」

カーリーもわかっていたと言わんばかりに大きな溜め息を付くと呆れ声で説明を開始する。
「何度も言ってるからわかってると思うけど君の躰はあくまでも仮の籠なんだよ。早いところセルプリズンに移さないと逃げ出す危険性だってあるん――」
「ああ～わかってるわよそんなこと。今まで一度だって逃がしたことないでしょ。もう少し私を楽しませてよ……ハアアァァ……このインキュバスが躰の中であがいている感覚がたまらないのよ……アウッ……凄く気持ちいい……ＳＥＸなんかより全然気持ちがいいんだから……こんなに気持ちいいのにイけないなんて……アウッ……射精を寸止めされているような感覚がズッと続くのよ……アアアァァ……狂っちゃう程気持ちいい……」
「……ホント呆れるよ。全く晴登はサディストなのかマゾヒストなのかわからないね」
本来子宮にインキュバスを捕獲している状態をこんなに楽しめるキャッチャーなどいないハズなのに、晴登はイクことができない状況を楽しんでいた。この耐えがたい状況を楽しむなどマゾでしかない。しかし、先程までの超サディスティックな晴登はどこへ行ってしまったのか？　全く情緒不安定にも程がある。それもこれも男である時に抑圧されすぎているのが原因なのかもしれない。
「ハアアァァァ……きょ、今日のインキュバスは凄く活きがいいの……アッアッ……凄いわ……凄すぎる……」
そう言いながら晴登は傍らに投げ捨ててあったコートを快楽で震える手でつかみ取った。いつもインキュバスを捜している時は全裸にコートと言う変態的な恰好だが、インキュバスを捕まえるにはＳＥＸをしなければならないので効率的な恰好とも言える。まぁ、この露出狂じみた恰好にも興奮していることは言うまでもないが。
「ハァハァ……早く家に帰ってして貰わないと取り逃がしちゃいそう……」

下腹部を抱えるように押さえて襲い来る快楽に耐える。
そんな時、世界を赤く染めていたマニトゥフィールドに一瞬ノイズが走った。
「???　なに今の？　見間違いかしら……ハウッ……それよりもホント耐えられないかも……さぁ、早く帰るわよカーリー」
ノイズなど気にした様子もなくコートを身に着けていく。しかし、晴登は気がつかなかった。赤い世界が海に潜ったように碧く染まっていくことに……
その変化に気がついたのは振り返った時だった。なんと傍らに飛んでいたはずのカーリーの姿はなく地面に転がっていたのである。
「チョットアンタなにしてるのよ。ってカーリー大丈夫」
いつまでも起きあがってこないカーリーを拾い上げると動かないどころか丸い躰の大多数を占めるデュアルライトのような目に「停止」の二文字が表示されていた。
「カーリー！　アンタどうしたのよ？　しっかりしなさいよ」
人間界に留まるための躰とは聞いていたので、別に両目に文字が浮かんでいることに驚いたわけではない、カーリーが機能停止しているのにマニトゥフィールドが展開されている……いや、別の碧いフィールドが展開されていることに驚いているのだ。しかし晴登は焦ることなく精神力で快楽を押さえ込み、冷静に辺りを見回すと10メートル程離れた場所に小柄な少女が立っているのに気が付いた。その傍らにはカーリーに似た丸い球体が両脇に着いた羽根をパタパタとはためかせて浮いている。ただその球体はカーリーとは違い真っ黒ではなく赤みがかった黒であった。
「貴方達も同業者？　なにか用事でもあるのかしら？」
距離を置く二つの影に問いかける。が、晴登は全身を緊張させ警戒を強めた。カーリーを機能停止にしたの

は確実に目の前にいる二人（？）が原因だろう、話合いをするつもりがないのは明らかだ。
声をかけられたのを合図に少女は一歩を踏み出すとゆっくりと近づいてきた。その行動から目をそらさず迎撃態勢を取って観察を続ける。射程内に入ったら攻撃を仕掛け先手を取るつもりで。
だがキャッチャーであろう少女の姿は少し異様であった。まぁ異様と言っても到底街中を歩く恰好ではないと言う意味でだが、その姿はまるでお人形さんのように可愛らしい。
外側にカールした金色の髪は碧く変わった月明かりを反射させキラキラと輝き、濃いブルーの瞳は深海を思わせる程深く、白いハイネックニットに白いショートジャケット。パンティーが見えてしまいそうな白いミニスカートはシフォンたっぷりのパニエで膨らみ、スカートから伸びる太股は程良く肉が付き、たっぷりといやらしさを醸し出している。そして背中には白い羽根が存在を誇示するかのように広げられ、極めつけは1メートルはありそうなアンティークの鍵をまるで刀のように持っているところだろう。オタク文化の進んだ日本では、ほとんどの人が少女の姿を見て「コスプレ」と言う単語が思い浮かぶ、晴登もそれくらいのことはわかったが一切興味がないので、なんのキャラクターのコスプレをしているのかわからない。しかもコスプレに対し偏見があるのか少女の姿を見て「うわぁ～あんな格好して恥ずかしくないのかね」と思わず口に出してしまいそうだった。一応口にしなかったのは、少女がなんの目的で現れたのか計りかねていたからである。
一切視線を離さない晴登の鋭い視線などどこ吹く風、少女は2メートルまで距離を詰めるとようやく立ち止まった。
「お初にお目に掛かりんす。わっちはアイルと申しんす」
少女は大きな鍵を地面に突き立てるとミニスカートの裾を両手で摘まみ満面の笑みを浮かべて挨拶をした。その可愛らしさと言ったら一切女に興味のない晴登ですらドキッとしてしまう程だ。
「アイルちゃんね。はじめまして……ってのんきに挨拶をしている場合でもなさそうなんだけど。一体どう言

うことかしら私のパートナーをこんな目にあわせて」
パートナーと言いながら晴登は既にカーリーのことを地面に投げ捨て、つま先立ちになり戦闘に備えている。
「そえな警戒なさらないでおくんなさいませ。まぁキャッチャーになった者同士ゆっくりお話と言う訳ではございんせんが」
いでたちに合った天使のような笑みで晴登の問いに答える。その笑顔にどこか恐ろしさを感じたのは晴登だけではないだろう。しかし、そんな挑発めいた笑みに動じることなく晴登も言い返す。
「キャッチャーになったんだから念願通り女になったってことでしょう。その割に貧相な躰してるじゃない。まぁ小さくて女の子には見えるけどもうちょっと胸を大きくしたほうがいいんじゃないかしら。せっかく女になったんだからさ」
これが女性のシンボルと言わんばかりに大きな胸を強調した。そんな晴登の態度をアイルはどこかおかしそうに微笑みながら見つめている。その眼差しはまるで子供を見ているようで晴登の笑みをひきつらせた。
「可愛らしい考えでらっしゃいんす。確かに胸を大きくすれば安直に女性に見えんすものねぇ。でもそれだけではダメなのでありんすよ。女性であるシンボルがなくとも女性に見えなくてはなんの意味があると言うのでありんすか」
「フン。大きいほうが男が喜ぶでしょう」
「フフフッ。なんと男性的な考えでありんすね。確かにそれも間違えではないのでありんしょうが、わっちは男性など関係ないのでその考えはわかりかねんす」
お互いの視線がぶつかる。その中心ではまるで火花が散っているように思える程互いを認めない意志が感じられた。
「アイル。そろそろ始めてくれるかしら」

今まで一言も発しなかったカーリーと同じ丸い生き物が話に割って入ってきた。その声に晴登は思わずアイルと火花を散らせていた視線を外し、アイルの横で浮かんでいる球体へ移していた。確かにその姿はカーリーと変わらない。だが、真っ黒なカーリーに対しアイルの横で浮かんでいる生物は赤みを帯びている、その上なんとも言えぬ威圧感が晴登をビビらせていた。

「あら、お話などするつもりなどなかったのでありんすが、随分ゆっくり話てしまいんしたわね。それでは始めさせていただきんしょう」

「フッ！」

アイルの言葉を待たず晴登は一歩距離を詰めると鋭い上段蹴りを繰り出した。

不意打ち――だがその蹴りをアイルは軽くバックステップしただけで簡単に避けてしまう。そしてわざとらしく驚いた声をあげてさらに挑発した。

「もうっ、いきなりなんでありんす。まったく黙って攻撃してくるなんて野蛮でありんす」

「なにを言ってるの。なにが目的か知らないけどそのつもりで来たのでしょう」

そう言いながら晴登は続けざまに蹴りを繰り出す。元々は運動神経も鈍い晴登だったが、チェンジすることにより思い描いた動きができるようになっていた。しかし、その止まらぬ攻撃もアイルはまるで踊っているかのようにヒラリヒラリとかわしていく。

「目的でありんすか？　そうでありんすね。目的も知らずにやられてしまうのはあまりにも可愛そうでありんす。それでは教えて差し上げんす。ぬし様の捕らえたインキュバスを譲って貰おうと思いんして」

「そう、横取りしにきたのね」

「簡単に言ってしまうとそう言うことでありんす」

「そんな可愛い笑顔で言われたからって簡単に渡すと思う？　それより魔界がどうなってるかは知らないけど

それってズルなんじゃないの？」

と言いながらも攻撃の手は緩めない。余程蹴りに自信があるのか、蹴り以外出さないところが面白い。

「そねぇなのズルに決まってるじゃありんせんか」

笑顔で蹴りを避けながら答える。自分で言っていることがわかっているのか一切悪ぶれた様子はない。

「それなら横取りなんて考えないで自分で捕まえた方がいいんじゃないの」

「おっしゃることはわかるのでありんすが、自分でと言うのがダメなのでありんす。男に抱かれると思っただけでゾッとしんす」

「エッ？」

その言葉に攻撃を止める。キャッチャーの多くがどちらかと言うと性同一性障害の人間が多い。自分の性に違和感を持ち、好きになるのは生物上の同性、そうであるなら今目の前にいるアイルが言ったことはどう言うことなのだ。

「女になってレズってわけ……」

自分の性に違和感を持ちながら、好きになるのは生物上の異性、精神的レズビアン。晴登も話には聞いたことがあったが、目の前にすると驚いてしまう。

「ちょっと待って……私をどうする気だったの。私が捕らえたインキュバスが欲しかったならセルプリズンに移した後に出てくれれば良かったでしょ！」

自分がアイルと絡んでいるところを想像してしまったのか、晴登は自らの躰を抱き小さく震えた。確かに晴登の言い分は至極もっともである。インキュバスが目的であればキャッチャーの体内にいる時ではなく奪いやすいセルプリズンに移された後の方が断然奪いやすいはずだ。

「そねえな勿体ないことしんせん。ちゃんとわっちが抜き取って差し上げんす」

「いや、私そんな趣味ないから」
さっきまでの勢いはどこへやら、晴登はどん引きした視線をアイルに向けていた。
そんな冷たい視線を送る晴登など気にもせず、アイルは意味深にスカートに手をかけた。
「安心しておくんなんし。ちゃんとコレでぬし様を満足させて差し上げられるのでありんすから」
そう言ってスカートを捲り上げる。
「な……」
晴登はなにも履かれていない下半身を見て驚きの声を上げた。当然パンティーが履かれていないことに驚いたのではない。パニエの奥から出てきた大きな男根に驚いているのだ。
「お、男だったの……」
晴登はそそり勃つ男根を見て素直な感想を漏らす。女に興味はないのでこの方が正常であるが、晴登は自分を犯してくれるようなたのもしい男が好みなので、この中性的と言うか女の子にしか見えない男の娘を見ても驚くだけで全然そそられるものではなかった。
「あら、女の子に見えんせんか？」
なにをとち狂っているのか、ビクビクと脈打たせている男根を晒しながらアイルは不満顔で訴える。しかし、この短いスカートのどこに20センチを越える男根が隠れていたのだろう。
「なに言ってるの。貴方おかしいんじゃない。そんなモノぶら下げて女って……貴方本当にチェンジしてるの？って言うか元は男？　女？　どっちなの」
プチパニック気味に晴登が訪ねる。この状況もアイルのペースになっていることなど気付きもしない。
アイルは自らの男根を左手で握ると軽く愛撫しながら怪しい笑みを浮かべた。
「さぁほんはどちらでありんしょう？　ふたなりって言うのはどちらと言えばいいのでありんしょうね？」

そう言って地面に突き刺していた大きな鍵を右手で抜くと晴登に向けて振るった。晴登がその動きに気付いた時には遅く、咄嗟に両手で庇うことしかできなかった。

アイルの手にしているのは剣ではなく刃など一切着いていない大きな鍵、予想される打撃に備え身を構え一瞬瞳を閉じるが、襲ってくるであろう痛みがいつまで経っても襲ってこない。恐る恐る瞳を開けてみるとアイルは先程と変わらず左手で男根を愛撫し、振るってきたはずの鍵はアイルの横に突き刺さっていた。

――な、なにが起こったの……えっ？

訳がわからず防御を解こうとした時、やっとその異変に気が付いた。躰が全く動かないのである。

「ぬし様の動きをロックしんした。と言ってもこのキャラの設定を知らなければなんのことだかわからないでありんしょうけどわっちはあらゆるモノにカギをかける魔法が使えるのでありんす」

そう、アイルは地面に突き刺さっているアンティークな鍵を使い、晴登の動きにカギをかけてしまったのである。晴登は目を瞑ってしまったのでわからなかったが、アイルが横一線に振るった鍵は確実に晴登の躰を捕らえていた。だが、鍵は晴登に痛みをあたえることなく躰を通り抜け動きだけをロックしてしまったのだ。

「……」

瞳以外動かせない晴登は声を上げることもできずにいる。カーリーにある程度魔法が使えるようになっていると言われていたが、そもそも魔法がなんなのかわかっていない上、ＳＦ、ファンタジーの類に疎く漫画的発想もできなかったので能力を具現化することができなかった。できたことと言えば肉体強化くらいで、アイルの凄い魔法を見て「まさかこんな凄い能力が備わっていたのか」と驚いてしまう。かといって使い方のわからない晴登にとって唯一の武器である体術を抑え込まれたらどうにもならない。

「フフフッ、いい表情になってきんした。ぬし様みたいに強そうな女性を制圧するのはたまらなく興奮いたしんす」

アイルの表情が変わった。目がうつろになりいやらしい笑みを浮かべ躰を小刻みに震わせている。完全に悦に入ってるようだ。

そして再び鍵を右手で持つと指揮棒(タクト)のように振って晴登の躰を動かしていく。その動き、まるで操り人形のようにぎこちない。そして最後に顔に目掛け鍵を振ると唇だけが自由に動くようになった。

「な、なんて格好させるのよ」

口が自由になった途端晴登は吠えた。その淫らな恰好、重力を無視し空中で躰が浮き、両手を背中で組まされ脚をM字に開かされている。流石の晴登も羞恥に耐えられず頬を赤らめていた。

「当然これからたっぷりぬし様の躰を味わうのでありんすから、そねえな恰好にもなりんす。それに呻くような喘ぎ声もいいでありんすけど歓喜に変わった時、ぬし様がどねえな台詞を言ってくれるか楽しみでありんすので口は自由にさせて頂きんした」

「フンッ、なに言ってるの。本気で私を満足させられると思って！」

この期に及んで晴登は強がりを言う。だが本当のところを言うと子宮に閉じ込めたインキュバスのせいでかなり我慢できない状況になっていた。しかもアイルの大きな男根を見て小さく生唾を飲み込んでいる程だ。女同士に抵抗はあったが、アイルはどっちつかずのシーメールなのでなんとなく受け入れられるのではと思ってしまったのが敗因なのか、股間が晴登の意志に関係なく疼いてしまっている。インキュバスを横取りされるのはシャクだが元はと言えばカーリーが早々にやられてしまったのがいけないのだ。そしてそれ以上に納得がいかないのは現在のこの状況である。Sっ気の強い女バージョンの晴登なのでどうしても受け入れがたく、負け惜しみが口から漏れてしまっていた。

「それはご安心おくんなんし。わっちは女性を喜ばせるのに少々自信がありんして、今まで抱いた女性は必ず満足させておりんす」

「……それは楽しみだわ。でも大きいだけじゃ私は満足しないわよ」
精一杯強がって笑みを浮かべてみるが、興奮してしまっているのか笑みが引きつっている。その強がる晴登を見てアイルも身を震わせ興奮を高めていた。
「それではいかせていただきんす」
どう言うわけか行儀良く一礼すると動けない晴登の太股に手を添え、左手で男根を握り尖端を秘裂に擦りつけ愛撫を開始した。
一回……二回……
舐め上げるように男根を動かす。
「……ウッ……ウッ……」
尖端がクリトリスを弾く度に晴登の喉の奥から喘ぎ声が上がるが、唇を少し噛むようにして漏れ出ないよう必死に抑え続ける。そのくぐもった喘ぎ声がまたたまらない。感じているのが丸わかりだ。
「フフフッ……随分と感じてらっしゃるみたいでありんすね」
「……ッ、こ、これは……貴方の……成果じゃ……」
「そうでありんすね。子宮にインキュバスを抱えていらっしゃるのでありんすもの。全くわっちの成果じゃありんせん。それでは頑張って感じて頂かないといけないでありんす」
わざと晴登の言葉に同意しながらゆっくりと、本当にゆっくりと挿入していく。
「……！！！」
唇を噛みしめ、瞼をギュッと閉じ必死になって喘ぎ声を上げないように努力しているが、その表情が快楽の強さを物語っていた。もしこれで躰の自由が奪われていなかったら確実に躰を大きく反らし快楽の痙攣が全身を襲っていただろう。

「あら、随分といい表情なされてんすね。まだ半分しか入っていないと言うのに全部入れたらどうなってしまうのでありんすか？　もしかして絶頂してしまうのでは？」
「……」
　アイルの問いなど聞こえていないのか晴登は答えることができなかった。だが、無言も答えの一つだと言わんばかりにアイルは満足の笑みを浮かべると残り半分を一気に根元まで突き刺した。
「アウッ……アアアアアァァァァ……」
　たまらず喘ぎ声が唇から溢れ出る。しかも一度決壊した唇はもう喘ぎを止めることはできなかった。
「ハァハァハァ……アッ……アッ……す、凄い……アウッ……凄すぎるぅぅ……」
　うっすらと瞳を開け必死に眼球だけを動かし股間を見下ろす。ただ挿入されただけだと言うのにこのまま絶頂を迎えてしまいそうな快楽に晴登の思考は一瞬で蕩けていた。この快楽、決してインキュバスが子宮で暴れているからではない。もしインキュバスがいなかったとしても同じ快楽を味わったことだろう。それ程、アイルの自慢する逸物は人間のモノとは一味も二味も違っていた。
「どうでありんすわっちのお味は？　とっても気持ちがいいでありんしょう」
　晴登の瞳を見ればそんなことわかっていると言うのに、アイルは意地悪にもそう質問した。
「アウッ……ハァァァ……き、気持ちいい……凄く気持ちいい……だから早く……早く動いて……」
「あらあら、もう落ちてしまったのでありんすか？　まだ入れただけだと言うのに……つまらないでありんす。もう少し意地を見せていただかないと」
　折角落ちたと言うのにアイルは不満顔で晴登を睨み付けるだけで全く動こうとしない。その間も晴登はさっきまでの威勢はどこへやら、動けない躰の代わりに必死になって口を動かしいやらしい言葉を紡ぎ続けた。そんな隠語を並べる晴登に飽きたのか、傍らに飛んでいた赤みがかった球体が不満を露わに言葉を発した。

「ねぇ、サッサと終わらせちゃってくれないかしら。こうなるのは分かり切っていたことでしょ。特にキャッチャーには我慢できる快楽じゃないんだから。なんてったってアイルは特別なんですからね」

「特別」確かにアイルは他のキャッチャーとはどこか違っていた。本人の考えかは知らないがインキュバスを横取りしようなどと言う考えは本来であれば魔界が作った捕獲システムを根本から揺るがしかねない。そしてなによりもその躰、胸が膨らんでいるのに大きな男根を持ち、睾丸までぶら下がっている。女性器がないので本当のふたなりとは言いがたいが、原型が男なのか女なのか解らない。この存在こそ異常なのだ。

「まぁしょうがないでありんすね」

自分の異常さを自覚しているのかいないのか、アイルはもう一度鍵を取ると晴登の腹に突き刺した。

その光景――

これもまた異常であった。晴登の躰には鍵穴などどこにもない。しかし、鍵はなんの抵抗もなく躰の中に入っていく。それなのに長尺の鍵は背中から突き出ることはなく、刀身の半分程入ったところでアイルの手が止まった。

「リリース」

小さな呪文と共に鍵を回す。

「アウッ……」

すると空中で固まっていた晴登の躰が突然地面に落ちるとしたたかにお尻を打ち付ける。だがそんな痛みなど気にもせず晴登は直ぐに躰を起こすとアイルにすがりついた。

「ハァハァハァ……お願い……コレを入れて……入れてよ」

「入れてじゃないでありんしょう。お願いする時はどうすればいいかくらいわかりんすね」

Sっ気たっぷりに晴登のアゴを指で引き上げニッコリと微笑む。全くこの可愛らしい顔とはかなりのギャッ

プに驚いてしまうが、きっとこのようなシチュエーションを好む人は結構いることだろう。
「お、お願いします……コレを入れて下さい」
本当にさっきまで男をいいように犯していた人物とは思えない変わりようだ。この変わりようからすると心底サディストだったわけじゃないらしい。まぁ、マッチョな男に犯されたいと考える時点で真性のサディストではないことはわかる。
「よくできんした。それじゃあ後ろを向きなさい。ぬし様みたい子は後ろからで十分でありんす」
「は……はい……」
アイルの言葉に晴登はコートを脱ぎ全裸になると四つん這いになって従順に後ろを向く。そして汚れることも気にせず大きな胸を地面に着けると挿入しやすいようにお尻を突き上げた。
「こ、これでいいですか……お願いします。早く入れて下さい」
「もっと抵抗してくれた方が興奮するのでありんすが、素直な娘も嫌いじゃないでありんすよ。それでは別な感じでイジメてあげんしょう」
亀頭で秘裂を愛撫しながら楽しそうな笑みを浮かべてそんな台詞を吐く、だが晴登はアイルの男根を今か今かと興奮しながら待ちわびているのか耳に届いていない様子だ。
何度も何度も秘裂を嬲り、たまらず晴登が挿入しようとお尻を突き出せば、それをさせまいとアイルが引く。そんなことを数分続けていると焦れた晴登が情けない声を上げた。
「ハァハァハァ……い、入れてくれるって言ったのに……なんで……お願いします。入れて下さい……お腹の中で暴れてるインキュバスなら差し上げます……だから……だからお願いです。早く入れて下さい……」
可愛らしい声を上げ瞳に涙を溜めながら肩越しにアイルを見上げる。クール系だった美女がこんなにも可愛らしくねだる状況、普通の精神だったら即挿入、即射精で終わってしまっただろう。だが、S性の強い人間は

この顔を見るためにやっているので、このくらいでは動じない。当然アイルも涼しい顔で振り返るのを待っていたかのように、視線が合った途端、一気に根元まで男根を突き刺した。

「アアァァァァ！！！」

悲鳴のような喘ぎ声が上がる。

両目をきつく閉じ、大きく口を開けて叫ぶ表情は快楽が強すぎるためかどこか苦しそうに見えた。だが、その表情を見てアイルは目を大きく見開き唇を残忍に歪ませている。天使のような姿をしているくせに、その表情は悪魔のようでどこか凶器を感じさせた。

「いいでありんす……それでありんす。その表情……素敵でありんす」

晴登の表情に喜んだアイルは腰を強めに押さえると叩き付けるように、膣の最深部を叩き割るように腰を振う。その強烈さは肌がぶつかる甲高い音が碧い世界に響き渡る程だった。

パン！　パン！　パン！

「ダメェェェ……イクッ！　イクッ！　イクイクイクイクイクイク！」

打撃音をかき消すように晴登の叫びに近い喘ぎ声が重なる。

絶頂の叫び声――

最高の快楽――

だが晴登の躰はいつまで経っても絶頂には達せず快楽が膨らみ続けた。

「！！！　な、なにコレ……イクッ……もうイクのに……もうチョットでイケるのに……なんで……なんでイッてくれないのぉぉ！」

アイルの男根が子宮をノックする度、絶頂してしまいそうな快楽が全身を覆い尽くしている。だが、あと一歩、男であれば後一擦り、女であれば後一突きされれば果ててしまう位置をキープし、薄皮一枚先に進んでく

れない。

「フフフッ。どうですか？　気持ちがいいでしょう」

嬉しそうに笑うアイルの手にはいつのまにか鍵が握られていた。鍵は背後から晴登の躰の奥深くまで刺さっており、絶頂にロックをかけると鍵を抜き再び地面に突き刺した。

「ハアアァァァ……ダメェェ……イカせて……お願いだから……イカせてください……」

晴登はなにをされたのかわからなかったが、この寸止め状態を作り出しているのはアイルであると確信できた。だからこそアイルに懇願したのだ。

「なにを言ってるのでありんすか？　先程までぬし様がやっていたことと同じでありんしょう。でも最高の快楽でありんしょう。何回も繰り返しイカせるのもオツでありんすが、こうして寸止めで苦しむ姿もまた至高でありんす」

そう言いながらもアイルの攻めは止まらない。背後位に飽きたのか晴登を横へ寝かすと片脚を跨ぎ、片脚を抱えるようにして「松葉崩し」で攻め、そして正常位に戻り、両足を持ち上げ正座させるようにして突き上げる「笹舟本手（ささぶねほんて）」へと移行する。その一連の動きはまさに手慣れており、よどみなく流れていく。その間も晴登には絶頂寸前の快楽が続いているのだからたまらない。

「ダメッ！　本当にダメェェ……壊れちゃう……ダメになっちゃう……アッアッ……インキュバスが欲しいならあげる……あげるからイカせて下さい……こんなにされたら気が変になっちゃう……壊れちゃう……」

「ハァハァハァ……アハハ……インキュバスを下さるの……でも残念ですわ。貴方に言われなくともこの状況……とっくにインキュバスはワタクシの手中にありんす」

「ハアアァァ……そ、そうだけど……だからってこんなの我慢できない……アウッ……もうどうなってもいい……だからお願いです。イカせてください……本当に壊れちゃいますぅぅ……」

そんな哀れな懇願もアイルには届かず、再び背後から晴登を背中から抱く「抱えどり」へと移っていく。
一体何分こんな状態を続けているのだろう。果てることのできない強い快楽の中、晴登は「もう二度と射精を我慢させるようなことはしない」と心に誓っていた。寸止めがこんなに苦しい行為だと初めて知った。インキュバスを子宮に治め楽しんでいたことなど、これに比べたらＳＥＸ途中の快楽でしかない。この寸止め地獄……一秒でも、いや一分でも早く逃れたい。だが晴登にできることはなにもなかった。ただアイルが満足し、一秒でも早く絶頂させてくれることを祈ることしか……
涙を流し快楽地獄を彷徨っている時、救いの糸はあらぬ方向からやってきた。
「後1分。後1分で終わらせなさい」
アイルの背後から見つめていた丸い生物が感情を込めずにそう言い放つ。
「どうして？　まだわっちは満足してんせん」
「始めから30分で片をつけなさいって言っておいたでしょ」
「そうでしたか？　それなら延長を申し込みんす」
「アイル！　毎回言うけどそんなことはしないって言ってるでしょ。言うこと聞かないと契約を切るわよ」
アイルの我が儘になど付き合ってられないと言わんばかりに、丸い生物はなんの起伏もなく言い放つ。この言い方、力関係はハッキリしているようだ。
「もう、最後にはそれでありんすのね。わかりんした。今日はコレくらいで我慢しておきんす」
不満げな台詞と裏腹に、アイルは目をランランと輝かせるとラストスパートと言わんばかりに腰のピッチを一気に上げた。その動きは単純なピストン運動だけではなく、腰を捻り、挿入角を変え、時にほじくるように、時に掻き回すように晴登を攻め続けた。
「ダメダメダメダメェェェ！！！　無理！　こんなの無理ィィ……1分も持たない……ダメダメダ

メェェ……」

晴登の悲鳴が続く。その声を聞いてアイルの表情が恍惚感に満たされていく。それはまるで心地よい音楽を聴いているかのようであった。

そして宣言通り1分が経とうとした時、アイルは傍らに突き刺さっている鍵に手をかけると再び晴登の背中へ突き刺した。

「アアアァァァ！　イクゥゥゥ……今度は本当にイクゥゥゥ！！」

今度こそ絶頂に達せられることを察知したのか、晴登の声色が変わった。

「ハァハァハァ……さぁ！　イッておしまいなさい！」

男根を深々と差し入れたところで動きを止め鍵を回す。と同時に晴登の躰が解放された。

「イクゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

歓喜の絶叫が碧い世界に木霊する中、アイルは冷静に鍵を抜くと傍らへ突き刺し晴登を背後から抱いた。そして一度大きく腰を振ると股間が小さく輝きインキュバスが吸い出されていく。いつもなら快楽を伴う放出であったが、今の晴登にはそんな些細な快楽が追加されたことなど気付きもせず、インキュバスは奪われてしまうのだった。

そして絶叫は徐々に小さくなり、それに感応するかのように碧い世界が色を取り戻していく。

月明かりの薄暗い公園――

遠くから僅かに街灯の光が届いてくる。そよ風が二人の頬を撫でていくと自然の音、遠くから聞こえる街の騒音が現実に戻ってきたことを教えてくれた。

だが、散々ため込んだ快楽の風船を弾けさせた晴登の耳にはそんな音など聞こえておらず、アイルの腕の中で荒くなった息を肩で吸いながら気絶していた。

「フフフッ……ごちそうさま。なかなか楽しかったでありんす。引き締まった躰素敵でありんした」
意識が飛んでいる晴登を後ろから強く抱き、耳元で囁いてから頬に唇を重ねた。先程までとは違い、優しい穏やかな瞳で晴登を見つめている。その瞳には愛さえ感じられる輝きを放っていた。が、唇を離した途端、アイルは抱いているのに飽きたのか腕を解いてしまった。
当然意識のない晴登は重力に逆らうことなく地面に崩れ落ちる。
ドサッ！
ここが土の上で良かったと思える程したたかに顔を打つ晴登。だがそのくらいの衝撃で意識を取り戻すことはなかった。
「おしまいでありんす。今日もしっかり横取りしんした」
秘裂から男根を抜きお尻を投げ捨てる。愛液を滴らせている男根は今も尚、月に向かってそそり勃っていた。
だが、先程までと違うところが一点――
男根はインキュバスを捕まえていることを誇示しているかのように緑色に光っていた。
そんな光など気にすることなく、アイルは勃起したままの男根をスカートの内側へしまう。一体どのような構造になっているのだろう。この短いスカートに勃起した男根が隠せるわけがないと言うのに、シフォンたっぷりのパニエスカートの中に男根ははみ出すことなく収まってしまった。
「ご苦労様」
その言葉を聞きながらアイルは傍らに刺さっている鍵を抜くと一度大きく振ってから振り返る。
「お待たせしんした」
「それじゃあ帰りましょう。アイル」
「わかりんした。マモン」

なぜか最後に息の合ったキャッチャーとプーブは、裸のまま気絶している晴登と転がっているカーリーなど気にすることなく一つ羽根を羽ばたかせ、冷たく輝く月に向かって飛び去っていくのだった。